

十輪寺

西山の麓に位置する十輪寺は、懐妊・安産祈願の寺として知られています。かつては、9 世紀の有名な歌人、在原業平（825 年～880 年）の隠居寺として使われていました。早咲きの桜の名所であるほか、人里離れた静かなこの寺院には、2 か所の庭園や伊勢物語の場面を描いた襖、そして業平の供養塔や伝統的な塩窯などの見どころがあります。

略歴

この寺院は、850 年に文徳天皇（826 年～858 年）によって、妃・藤原明景子（ふじわらのあきらけい、829 年～900 年）との子の安産を祈願し、木造延命地蔵菩薩(英語：Jizo of long life)を祀り、創建されました。天皇の祈りは聞き届けられ、後にその息子が天皇の座に就きました。この地蔵尊は、天台宗の開祖である最澄（伝教大師、767 年～822 年）の作と伝えられています。

十輪寺は、京都の大部分に被害をもたらした将軍の継承を巡る争いである応仁の乱（1467 年～1477 年）で焼失しました。寛文時代（1661 年～1673 年）に貴族の花山院家によって再建されるまで廃墟と化していました。十輪寺は花山院家の菩提寺となり、埋葬儀式を執り行い、墓を管理し、死後の冥福を祈る役割を果たしました。

在原業平の隠居寺

業平は二人の天皇の孫であり、皇子として生まれました。彼の父親が政変未遂に連座したことで幼い業平は臣籍降下となり、平民としての姓を与えられました。それにも関わらず、業平は宮廷で様々な役職を歴任し、優れた朝廷の役人、有能な戦士、熟練の騎手、そして才能あふれる歌人として知られていました。彼はハンサムな男性として知られており、天皇の妃や伊勢神宮の斎宮とのロマンスなどの多くの恋の噂は、古典的な詩集であり関連する散文物語でもある『伊勢物語』に影響を与えたと考えられています。

寺伝によれば、業平は晩年を十輪寺で隠遁したとされています。10 世紀の歌集『古今和歌集』には彼の最後の和歌を含む多くの作品が選ばれ、その歌集における六歌仙の 1 人にも彼は指名されています。

つひに行く
道とはかねて
聞きしかど
昨日今日とは
思はざりしを

(ドナルド・キーン訳)

境内

本堂は 1750 年に建てられた、京都府の指定有形文化財です。珍しい鳳輦形の屋根は、かつて宮廷の要人を運ぶために使われていた輿の湾曲した屋根のような形をしています。延命地藏尊は、他のいくつかの仏像に囲まれた小さな祭壇の中に祀られており、年に 1 回、8 月 23 日に一般公開されます。主祭壇の両側にはさらに 2 体の仏像があり、堂内には多数の奉納された押絵が展示されています。

本堂と庫裏（僧房と台所）は屋根付きの通路で繋がっています。2 部屋の畳の部屋には、伊勢物語や 18 世紀後半のガイドブック「都名所図会」などの寺宝や美術品が展示されています。襖は、雅な衣をまとった貴族や音楽家、使用人などを描いた『伊勢物語』の場面の大きな絵で彩られています。

本堂と庫裏の間には、第 27 代当主・花山院常雅（1700 年～1771 年）の作庭とされる「三方普感の庭」があります。この中庭は見る人が立ったり、座ったり、寝ころんだりすることで、少しずつ違った表情を見せてくれます。春先に花を咲かせ瓦屋根に枝を垂らす、樹齢 200 年の有名な業平桜があります。庭園の横には、室内に様々な美術品が展示されている常雅好みの茶室もあります。

寺院のお堂裏の坂道から、珍しい本堂の屋根と業平桜を眺めることができます。坂道の途中に、業平の墓所を示すとされる小さな石塔があります。丘の上の大きな土坑の中央に造られた石製の塩釜は、業平が十輪寺に住んでいた頃に使われたとされる塩釜を再現したものです。平安時代（794 年～1185 年）の貴族は、海水を塩だけが残るまで沸騰させ、海の香りとイメージを楽しみ、時には煙に色を付けるために焼き塩に顔料を加えました。来訪者は 11 月 23 日の塩釜清め祭にて、塩焼きと呼ばれるこの優雅な遊びを見ることができます。